



SCRC NEWS

センターニュース

2007 June. No.6

熱視線「三遠南信地域」のために

新城市長 穂 積 亮 次



変わる基礎自治体、進む三遠南信自動車道、第二東名高速道路の整備工事、この圏域を取り巻く環境は日々刻々と大きく変化しており、ことに県境の引佐ジャンクション周辺の変貌は目を見張るばかりで、今後もこの発展は加速するものと熱い思いを抱いております。

合併後、県下の約10%を有する広大な面積となった新城市にとって、この二つの道路整備は、中長期にわたる地域再生戦略の骨格でもあり、県境を超える更なる地域連携が、新しい資源活用の可能性を掘り起こすものと期待しております。

また、特筆は、旧鳳来町七郷一色小学校を地域間交流施設に改修、「三河コンベクションアカデミー」として昨年度組織され、貴センター、大学の持つ知的財産と地域の文化を融合、対流させる地域活動が始動したことにより、密接な連携と交流が促進されるものと思います。

一方、地方分権が進むなか、道州制の具体的な議論がなされており、その案では愛知と静岡は同一のブロック、一方長野はいずれでも別ブロックとなっております。

しかし、日本の中央に位置する、東三河、遠州、南信州の3地域は、生活、文化など県境を越えた一体的な圏域として交流を続け、環境、観光、産業振興など広範な政策が展開できる地域であり、これまでの活動と交流、地域の自立という観点からも今後の道州制改革の中で、新たな議論を呼び起こすものと考えております。

今、私たち自治体には、新たな時代の要請に応えるための創意工夫と、時代の流れを的確に読み取る進取の政策構築が求められています。

こうしたことから「三遠南信地域連携センター」の担う役割や期待は大きく、産学官民が交流するサミットへの取り組み、それぞれが共有できる地域振興の新しいビジョン策定など、三遠南信地域の一体性を確保するばかりでなく地域のポテンシャルを高め広く内外に訴えるもので、次代を展望し発信する地域貢献の拡大と飛躍に胸躍る想いがあります。

CONTENTS

巻頭言	1
センター事業の取り組み状況	2
• 学術的共同研究事業	
• 官学連携事業	
• 教育・人材育成事業	
センター・トピックス	4
• ブックレット 第2号	
• 東三河データブック	
• 地域づくりと多文化共生	
パネルディスカッション	
• 「みち」の力を考えるフォーラム	
• 東栄町地域づくり講演会	
• エコ地域づくり戦略プラン	
サポーターの活動から	7
• だがしろう成果報告会	
• 全国学生まちづくりフォーラム	
サポーター活動記録	8
センター活動記録	9
センター会議委員	11
センター刊行物一覧	12
RA・研究員紹介	12
編集後記	12

学術的共同研究事業

事業責任者 岩 崎 正 弥

昨2006年度は、6回にわたる「地域づくりガイドライン」作成に関する委員会を開催し、体系的地域学の構築を目指して質疑応答を重ねた。今年度は、さまざまな地域学が蓄積してきた“知”の分類化を通して、各地域住民自身が自地域を知るための〈地図〉を作成する作業を予定している。

分類化（地図）といっても、決してマニュアル作りを目指すわけではない。より地域普遍的な理念と、より個別具象的な事象との相関関係を図示し、自らの立ち位置と、今後の歩むべき方向性に関する、“気づき”と“学び”を誘発できるようなものを意図している。

なお、こうした“地域学知”の分類化は、データ

ベース化・GIS化のコンテンツ作成としての基礎的な作業であり、また地区力点検・地域づくり評価へと架橋する前提となるものであろう。したがって、今年度は昨年度以上に、他の二つのプロジェクト（GIS・データベース、地域づくり・地域経営評価システム）と連携しながら作業を進める予定である。

2007年度は、すでに5月8日に第1回委員会が、6月5日に第2回委員会が開かれている。

2005年度～06年度のプロジェクト研究「流域社会の近代化過程に関する総合的研究」は、その暫定的取りまとめを報告書として刊行し、最終報告書の出版に向けて準備を進めているところである。

官学連携事業

事業責任者 黍 嶋 久 好

「地域づくり・地域経営評価システム開発研究会」を2006年5月に発足させ、地域づくりの主体である住民の視点から「地域力の点検の仕組み」と「地域経営の評価システム（道具）」の開発をめざしている。

研究会の構成員は、国土交通省・池田豊人氏、愛知県安城市・稲垣英樹氏、国連地域開発センター・高井克明氏、静岡県浜松市（前佐久間町）・小原侃之輔氏、日本システム開発研究所・諸橋和行氏。愛知大学からは、センターの佐藤元彦センター長、蔣湧、岩崎正弥、岸本恵次郎の各事業責任者がオブザーバーとして参加している。

研究会では、三遠南信地域での地域づくり、地域力の点検手法と地域経営のための評価道具の開発と構築に向けて、現地調査とあわせて点検・評価の道具モデルのデザインが検討されてきた。

第1回研究会(2006年6月3日愛知大学豊橋校舎にて)、第2回研究会(2006年7月28日愛知大学東京事務所にて)、第3回研究会(2006年9月1日愛知大学車道校舎にて)、

第4回研究会(2006年10月6日愛知大学豊橋校舎にて)、第5回研究会(2006年11月28日安城市役所にて)と、2006年度を通じて5回の研究会が開催された。

三遠南信地域は、中小都市地域、中山間・山村地域、農村地域の特性を併せ持つ地域である。今回の「地域づくり・地域経営評価システム」の開発構築の視点は、中山間・山村地域におかれている。三県境にある中山間・山村地域の地域づくりに対する認識として、「中都市に隣接している中山間」、「限界集落の出現を秘めた奥地山村」、「中山間地で内発的な地域づくりの実績を持つ地域」に注目した。このパターンから、三遠南信での地域づくり・地域力の点検の物差しと地域経営の評価の仕組みのガイドラインの構築をめざすものである。既に、長野県下條村、愛知県東栄町、静岡県浜松市（旧天竜市）熊地区で先行調査を行った。2007年度は点検・評価道具のガイドラインを示し、現場での実用と研究につなげたい。

教育・人材育成事業

事業責任者 岸 本 恵次郎

1. 三遠南信コミュニティカレッジの展開

2005年度は愛知県との連携事業として「とよがわ流域大学」を実施したが、2006年度は、一方で修了生の共同提案事業を展開しながら、三遠南信コミュニティカレッジという新たな枠組の下で国土交通省豊橋河川事務所と東三河地域研究センターとの連携事業「とよがわ流域圏講座」を開講した。

前者のとよがわ流域大学共同提案事業は、2グループが活動を展開した。一つは、「人と人が寄り添う集落づくり」をテーマに田原市野田の西馬草集落の住民から5回にわたって聞き取り調査を行い、とりまとめを行って、地域社会の「温暖化」＝「暮らしやすい集落」の形成をめざしたものの。もう一つは、「特色ある流域圏づくり活動」で、豊川上流域の住民・高校生1,553人を対象にアンケート調査を行い、回収（1,236部、80％）・分析したもので、いずれも示唆に富む内容となっている。5月12日には2グループの成果報告会が行われると同時に、2007年度の共同提案事業の募集説明会が行われた。2グループの具体的内容は、『2006年度とよがわ流域大学修了生グループ提案事業成果報告書』として取りまとめられている。

後者は、今後センターが行う人材育成をめざす講座等を「三遠南信コミュニティカレッジ」の名称のもとで開催することにし、その最初の事業として実施されたものである。これは「森・川・海」に視点を置き、流域圏づくりに向けた市民参加型活動の担い手育成をめざしたもので、40名が受講した。受講生は4回の講座のうち3回をワークショップ方式で議論を重ね、エクスカージョンとパネルディスカッ

ションでの知見と課題提起を踏まえて「市民としてこれからできること」の成果発表を行った。2005年度に比し、コンパクトな講座であったが、32名が修了証書を手にしており、今後の活躍を期待したい。講座内容、受講生の成果報告は、『とよがわ流域圏講座成果報告書』として取りまとめられている。

2. 地域づくりインターンシップの推進

2006年度の地域づくりインターンシップは行政関係を中心にすすめられ、参加学生は豊橋校舎6自治体へ10名、名古屋校舎8自治体へ14名と、前年の4名に較べて大きく拡大した。国土交通省の地域づくりインターンシップにも5名の学生が参加した。また、地域づくりインターンシップの一環として学校インターンシップの導入につき豊橋市に申し入れ、具体化に向け協議を行っていくこととしている。

3. 地域づくりサポーター・アドバイザー制度の拡充

地域づくりサポーターの自主的活動として企画された「愛大生の店・だがしろう」は、南栄町住民の協力をえながら4月6日の開店から12月23日の休止まで9ヵ月間にわたって営業を行い、豊橋市、安城市のイベントにも出店するなど多彩な活動を展開した。2007年2月10日には住民、行政をまじえての報告会が行われ、成果と課題が確認された。また、売木村新米祭りには2005年度に引き続き参加したほか、サポーターが自ら米づくりに挑戦したこと、同村からの委託事業「定年さん・おいなんよ ふるさとづくり促進事業」をサポーター事業として行ったこと、など昨年よりいっそう幅広い活動が展開された。この2つの活動は、『愛大生の店・だがしろう成果報告書』、『売木村「定年さん、おいなんよ」計画報告書』としてまとめられている。

一方でサポーター活動は、新規サポーター、とくに2年次生の参加が少なく、また、自主的活動に委ねていることから事業への参加にも偏りがみられるなどの課題が明らかとなった。サポーター会議では、学習会を開いたり、メーリングリストで情報提供を行うという工夫をこらしている。センターにおいても各種研究会にサポーターの参加を認め、学生の「学び」を支援することとした。

とはいえ、2007年度は15名の新サポーターを迎えた。売木村新米プロジェクト、豊橋市のよびかけに応



えての外国籍児童アフタースクール事業、全国学生まちづくりサミットの豊橋での開催等を予定しており、これまで以上の活発な取り組みをすすめていきたい。

また、センターでは、東栄町からの依頼を機に「地域づくりアドバイザー制度」を立ち上げた。この制度は、愛知大学が持つ地域研究の実績と知的財産をもとに地域づくりの協働事業を推進していくことで、「地域の中に大学をおく、大学の中に地域をおく」ことを実現し、地域が求めている大学との連携の具体化をはかるものである。具体的運営は、アドバイザー会議を設置し、推進していく。

4. 地域住民との連携推進

2006年度の三遠南信サミットが東三河で行われるにあたって、豊橋市より当センターに住民セッションの事務局担当の依頼があり、あわせて実行委員会（市民団体連携委員会）を設置して、住民セッションの準備をすすめた。住民セッションは、二つの分科会、

昼食交流会、全体会の3部構成で行い、130名を超える住民の参加があり、貴重な意見交換、交流の場となった。この成果を今後を受け継ぎ、ネットワークづくりに生かしていく必要がある。この取り組みは、『三遠南信サミットin東三河2006住民セッション成果報告書』にまとめられている。

このほか、地域住民との連携事業として新城市七郷一色地区住民とのウィークエンドセミナーがあげられる。これは、小学校跡地を地域間交流施設として本学と豊橋技術科学大学とが共同利用し、三河コンヴェクションアカデミーの一環で行うものである。2006年9月に第1回を開催し、11月、12月に両大学がそれぞれセミナーを実施した。2007年度も継続することになっており、4月21日には岩崎・センター事業責任者が講師となって「地域の“自治”を考える」をテーマにセミナーが再開された。

CENTER

センター・トピックス

NEWS

★「三遠南信地域連携ブックレット」第2号を刊行★

2006年3月にブックレットの創刊号を発刊し、この度第2号が発刊された。今号は、社団法人東三河地域研究センターの主任研究員、戸田敏行氏と、同センターの研究員、高橋大輔氏(愛知大学大学院文学研究科地域社会システム専攻博士後期課程在籍中)に執筆を依頼した。ブックレットは、「県境を越えて地域づくりを考える」をテーマに、戸田敏行氏が県境地域のかたち、県境地域の持つ課題、全国に広がる県境地域活動、県境地域づくり活動の実際、市町村合併と県境地域、これからの県境地域づくり等がかかえている諸課題、実際の活動等につき、執筆している。

また、同センターの高橋大輔研究員は、地域づくりの実践事例として、南部州地域(青森・岩手・秋田

県の県境地域)、両毛地域(栃木、群馬県の県境地域)、飛越地域(富山、岐阜の県境地域)、福滋地域(福井・滋賀県の県境地域)、九州中央地域(大分・熊本・宮崎県の県境地域)、南九州中央地域(熊本・宮崎・鹿児島県の県境地域)の取り組みについて、具体的に紹介している。

「地域」とは、一定の範囲の土地ということであろうが、人と人とのつながりを基盤とした心のつながり、またその人の成長過程により地域の範囲が異なることもあり、問題は多岐にわたっている。こうしたつかみどころを得にくい側面をもつ「地域」だが、その活性化、再生、発展等のため、課題、実際の活動事例、実践事例等につき、県境域を跨ぐ視点からわかりやすく説得力をもって描かれている。

★— 東三河データブック調査・分析結果がまとまる —★

東三河地方拠点都市地域整備推進協議会（会長・豊橋市長、11市町村で構成する広域行政組織）より受託している「東三河データブック調査・分析」業務は、東三河自体の実力や潜在力、地域課題を明らかにし、広域共同圏の形成に資することをねらいとしている。

2006年度の調査分野は、「人口推移」「生活」「交通ネットワーク」「施設」「文化」「機能」「イベント・まつり」であった。調査・分析にあたってプ

ロジェクト委員会を置き、経済学部佐藤元彦教授、新井野洋一教授、印南敏秀教授、西村正広助教授、国際コミュニケーション学部市野和夫元教授、文学部和田明美教授、そして三遠南信地域連携センターの黍嶋久好上席研究員、平川雄一研究員、暁敏 R A で組織した。

調査分析結果については、『平成18年度東三河データブック調査・分析等業務報告書』としてまとめられている。

★— パネルディスカッション「地域づくりと多文化共生」を開催 —★

グローバル化が進む中で、地域をめぐる国際化が大きな取組み課題となっている。政府（総務省）も「多文化共生の推進に関する研究会」を発足させ、昨年3月には報告書をまとめた。そのなかでは、地域における多文化共生に重点が置かれている。今後の地域づくりにおいても「多文化共生」ははずすことのできないキーワードだと言えよう。こうした動きを踏まえて、センターは、去る2月16日に「地域づくりと多文化共生」をテーマとする公開パネルディスカッションを中部大学人間安全保障研究センターと共同で開催した（愛知大学豊橋校舎）。中部大学人間安全保障研究センターは、三遠南信地域連携センターと同様に、文部科学省の私立大学学術研究高度化推進事業に採択され、人間安全保障の観点から多文化共生の研究を進めている。

当日は、パネラーとして、二宮正人（サンパウロ大学教授）、アルシーデス・ビデオ・田中（豊橋ブラ

ジル人協会会長）、羽後静子（中部大学助教授）、メアリ・アンジー・ダーノイ（英語教師）の4氏を迎え、佐藤センター長が司会を務めた。羽後氏を除く3名からは、実体験を踏まえた「多文化共生」の虚実が紹介され、また、羽後氏からは、人間安全保障研究センターとして実施した名古屋市や春日井市での調査の概要が報告された。多くの論点が提起され、フロアーからの質疑を交えて、活発な討論が展開されたが、特に関心が集まったのは、日本人 vs 外国人という図式のみで考えられがちで、かつ言語の問題として片付けられる傾向の強い「多文化共生」を、在日の外国人同士の関係を含めて、かつ文化共生の問題として考えていくことの必要性であった。

センターでは、2007年度も、このテーマに継続して取り組み、その成果を地域づくりのあり方に活かしていく予定である。



★— 三遠南信「みち」の力を考えるフォーラムを開催 —★

愛知大学と国土交通省東海幹線道路調査事務所の連携事業として、2007年3月3日に新城市文化会館



において「三遠南信“みち”の力を考える」フォーラムを開催した。2005年度に国土交通省東海幹線道路調査事務所から

「三遠南信地域連携施策検討業務」を受託し県境の中山間地を対象に地域力、地域資源に関する調査を実施したが、フォーラムでは、その結果をふまえ、2005年度調査で協力をいただき、地域づくりの実績を持つ長野県売木村・NPO法人つみくさの里うるぎの原光秋さん、愛知県設楽町・道の駅アグリステーションなぐらの後藤昇さん、静岡県旧天竜市熊地区・大栗安棚田倶楽部の鈴木芳治さん、国土交通省東海幹線道路調査事務所・長田真一さんをパネラーとし

て迎え、「地域が育むみち、地域を繋ぐみち、地域を潤すみち」をテーマとして討論を行った。討論に先立って佐藤元彦センター長が、「地域づくりとみちの力」と題して基調講演を行った。討論では、岩崎正弥センター事業責任者がコーディネーターをつとめ、ハードとしての道路だけではなく、地域が持つ「地域力・資源力」「起業」「人的な関係」等の地域に蓄積されている地域づくりの手法、作法、ものさし等としての“み



ち”につき意見交換された。このフォーラムは、単発の連携事業として実施されたが、3月3日のフォーラムの一つの成果

として三遠南信コミュニティカレッジ「三遠南信『みち』の力を考える」構想の実現を図りたい。

★— 元気なまちづくり支援の発進 —★

2006年度から愛知県東栄町の独自事業として「元気な地域づくり支援事業」が実施されている。その事業の一環として2006年6月に「地域振興アドバイザー派遣業務」に関する覚書が東栄町長と三遠南信地域連携センター長との間で交わされた。東栄町には19の区があり、それぞれの区単位ごとに「まちづくり協議会」が組織され、区が抱える課題の解決、活動の方向、地域の将来等々、小さな自治づくりの助走がはじまっている。区からの要請を受けて、三遠南信地域連携センターに「地域づくりアドバイザー」として登録している先生方に現地に入ってもらえることになる。初陣として、2007年2月21日に東栄町まちづくり町民の会主催の「地域づくり講演会」において佐藤元彦センター長が、「これからの地域運営・活動と住民自治」と題して講話を行った。講演会では、また、既に元気なまちづくり事業を先行している自

治区、まちづくり協議会の事例が発表された。平成の大合併で非合併を選択した東栄町民がめざす住民自治の形成を、センターとして支援していきたい。まちづくり講演会以降、3月10日に月地区まちづくり協議会の派遣要請を受け三遠南信地域連携センターの事業責任者黍嶋久好、岸本恵次郎、RA暁敏が月地区に伺い、本格的なアドバイザー活動がスタートした。



★— 県境を跨ぐエコ地域づくり戦略プラン・第1回研究成果報告会が開催 —★

2006年度よりスタートした豊橋技術大学との連携融合事業「県境を跨ぐエコ地域づくり戦略プラン」研究会。愛知大学三遠南信地域連携センターも、この事業のコストシェア大学として、幾つかの部会に参画している。2007年3月26日、ホテルアソシアにて、第1回研究成果発表会が開催され、センターからは、「ソーシャルキャピタル・社会力評価部会」の部会長・岩崎正弥と「中山間地定住促進・地域再生部会」の部会長・黍嶋久好が報告をした。

両部会とも、2006年度は調査研究のための準備期間であった。次年度以降互いに連携しながら、「地域力（ソーシャルキャピタル）」を活かした地域再生（中山間定住）の具体的な手立てに関して調査研究を進める予定である。報告では、06年度の研究成果と07年度に向けた計画を披露した。フロアーには、大学関係者を初め、研究機関、行政、NPO団体、マスコミ関係者など多数の来場があった。若干専門的過ぎるという傾向は否めなかったが、それぞれの

報告に対して活発な議論が交わされた。

もっとも小さくない課題も浮き彫りにされた。本研究会が「エコ地域」を掲げているにもかかわらず、「エコ地域」に関する各部会の共通理解が必ずしも十分ではないということである。この問題は、研究報告会に先立つ幹事会でも意見表明されたが、研究報告会においても詰めきれてはいなかった。ことに、人文社会系の部会である2部会と、自然科学系である他部会との間で共通理解をもつことは、今後の戦略プランを構築する上できわめて重要であろう。さしあたりセンター関係の2部会では、〈地域の持続可能性〉という観点から「地域力（ソーシャルキャピタル）」や「地域再生」、「中山間定住」を考察している。自然環境への配慮は、地域社会が維持存続する上で、〈しきたり〉や〈おきて〉として、すでに・つねに内在化されていたはずである。あえて自然環境という視角を独立させて、その共生を強調せざるをえないところに、地域社会の疲弊が表れているともいえるだろう。

CENTER

地域づくりサポーターの活動から

NEWS

★— 「愛大生の店：だがしろう」成果報告会を振り返って — 経済学部4年 片野晃秀 —★

今年の2月10日（土）に愛知大学豊橋校舎の記念会館で、「愛大生の店：だがしろう」の成果報告会が行われた。これは2006年4月6日（木）から12月23日（土）までの約9ヵ月間の活動を振り返り、この駄菓子屋という地域づくり活動についての成果や課題について検証し、共有するというもの。当日の参加人数は少なかったものの、豊橋市の教育長をはじめ職員の方々、いつも店に来てくれた子供たちや地域住民の方々も参加された。この報告会で嬉しかったことは、来てくれた子供たち全員が最後まで居てくれたこと。4時間半にもわたったにもかかわらず、彼らは夕方になっても帰ろうとはしなかった。これらは、子供たちからの「だがしろう」や我々大学生に対するメッセージだと受け止めている。また、豊橋市の加藤教育長から「地域には駄菓子屋ではなく『だがしろう』が必要だ」と言っていただいた。この事業は、駄菓子屋がやりたくて始めたのではない。駄菓子屋を通してその先にあるものを求めていた。この点について、市の教育行政トップの方から評価して頂けたことは大変ありがたく思う。この報告会だ

けでは充分ではないが、あらゆる立場の人からの「だがしろう」に対する意見や思いを交換することができ、「だがしろう」が教えてくれた成果や意義などについて共有することができたと思う。これが過去のものとして終わることなく、愛知大学及び全国で学生まちづくりを推進している各大学や地域住民によってなんらかのかたちで受け継がれていくことを「創業者」として強く願っている。





私は、2007年2月17日（土）に関西学院大学で開かれた「学生まちづくりフォーラム」に参加しました。参加したきっかけは、単純にどんな学生がまちづくりに興味を持っているのか、

実際に活動内容や熱意を肌で感じてみたいと思ったからです。ですから、好奇心旺盛な私にはこのフォーラムは大変魅力的に感じられました。このフォーラムには、全国から地域・まちづくりに積極的な学生がたくさん参加していて、私は愛知大学の地域づくりサポーターとして片野さんと一緒に参加しました。当日は、少人数のグループに分かれ、与えられたテ

ーマについてディベートをし、最後に参加者全員の前で発表するといった形式で行われました。他大学の学生は、今何について取り組んでいるのか、何をどうしていきたいのかという考えをしっかりと持って、参加した学生同士が意見交換するのを望んでいました。私も地域づくり、特にゼミのテーマである多文化共生に関心があるので、積極的に自分の考えを表現しました。しかし、彼らは具体的に問題を投げかけ、相手に分かりやすく伝えることが大変上手で驚きました。このフォーラムに参加して今後の活動を考える材料を得ただけでなく、話し方・聞き方・ものの見方という基本的で重要な事柄についても学ばせていただきました。今後もさまざまな形で地域に関わって行きたいです。

◇ サポーター活動記録（2007.1～2007.3）

日 時	活 動 内 容
2007年1月24日（水）	「定年さん、おいなんよ」の報告書作成作業（受け入れマニュアル作成の土台づくり） サポーター（近藤、辻、保木、三宅、大石）
2007年1月27日（土）	「定年さん、おいなんよ」の報告書作成作業 サポーター（近藤、辻、保木、三宅、大石）
2007年1月29日（月）	「定年さん、おいなんよ」の報告書作成作業 サポーター（近藤、辻、保木、三宅、大石）
2007年1月31日（水）	地域づくりサポーター定例会議 岩崎、黍嶋、岸本、平川、暁、サポーター
2007年2月10日（土）	「愛大生の店:だがしろう」（駄菓子屋）成果報告会
2007年2月17日（土） ～18日（日）	全国学生まちづくりフォーラムに参加（於：関西学院大学） サポーター（片野、村上）
2007年3月 9日（金）	売木村ふるさとづくり促進事業調査報告会準備 サポーター（近藤、保木）
2007年3月17日（土）	地域づくりサポーター個人研究発表会 サポーター（大松、三宅、大堀、保木、王、伊藤、芝田、加藤千、山内、近藤、山本、大石、辻、片野、天野、小川、村田）
2007年3月18日（日）	売木村ふるさとづくり促進事業調査報告会（於：売木村役場） 岩崎、黍嶋、サポーター（近藤、片野、三宅、大石、保木、宮本、村上、辻）

◇ 三遠南信地域連携センター活動記録 (2007.1～2007.3)

月	日	曜日	研究会・委員会等名	会 場	出席者・概要
1月	10日	(水)	東三河懇話会主催 “東三河5市長・2郡町村会長を囲む新春懇談会” パネルディスカッションで佐藤センター長がコーディネーターを務める	豊橋グランド ホテル	
	11日	(木)	運営委員会 (06-18)	センター事務室	
	13日	(土)	2006年度第2回センター会議	研究館 第1、2会議室	
			愛知大学・東三河地域研究センター・ 国土交通省豊橋河川事務所連携事業 「とよかわ流域圏講座」 第6回 成果発表会・修了証授与式・交流会	本館5階 第3、4会議室 本館5階 第2会議室 (交流会)	コメンテーター 中津川誠 (国土交通省豊橋河川事務所長) 金子鴻一 (東三河地域研究センター常務理事) センター長
	18日	(木)	第2回東三河データブック調査・分析研究 中間報告会	豊橋市役所	黍嶋、市野、平川、暁
	25日	(木)	運営委員会 (06-19)	センター事務室	
2月	10日	(土)	運営委員会 (06-20)	センター事務室	
			地域づくりサポーター共同提案事業・駄菓子屋「だがしろう」成果報告会	豊橋校舎 記念会館小講堂	
	16日	(金)	「地域づくりと多文化共生」に関する公開パネルディスカッション	6号館 623教室	パネリスト： 二宮正人氏 (サンパウロ大学教授) 羽後静子氏 (中部大学助教授・人間安全保障 研究センター副代表) アルシーデス・ヒデオ・タナカ (田中) 氏 (豊橋ブラジル人協会会長) メアリー・アンジー・ダーノイ氏 (英語教師) 司会：センター長
	17日	(土)	地域づくりガイドライン研究会／ 地域づくり・地域経営評価システム開発研究会／ GISデータベース研究会 3事業合同研究会 「グローバルな視点に立った『地域づくり』トータルシステムの開発に向けて」	研究館 第1、2会議室	研究報告 「地域づくりのガイドライン」 岩崎 「GISを利用した地域づくりの実験」 蔣 「地域づくり・地域経営の評価システム」 黍嶋 パネルディスカッション パネリスト： 岩崎、蔣、黍嶋 池田豊人 (国土交通省道路局企画課企画専門官) 三宅淳子 (企業組合ウェルネスプランニング代表、 NPO法人三遠南信アミ会員) 東 善広 (滋賀県琵琶湖・環境科学研究センター 主任研究員) 高井克明 (国連地域開発センター研修部長) コーディネーター：センター長
	17日	(土)	全国学生まちづくりフォーラムへ参加	関西学院大学	サポーター (片野、村上)
	18日	(日)			
	21日	(水)	地域づくり講演会～町民が主役のまちづくり～	東栄町花祭会館	講師：センター長
	22日	(木)	運営委員会 (06-21)	センター事務室	

(次ページにつづく)

月	日	曜日	研究会・委員会等名	会 場	出席者・概要
3月	3日	(土)	国交省東海幹線道路調査事務所・愛知大学共催 『三遠南信・「みち」の力を考える』フォーラム	新城文化会館	基調講演：「地域づくりとみちの力」センター長 討論：「地域を育むみち、地域を繋ぐみち、 地域を潤すみち」 コーディネーター：岩崎 パネラー： 原 光秋（NPO法人つみくさの里うるぎ理事長） 後藤 昇（道の駅アグリテーションなぐら 代表） 鈴木芳治（大栗安棚田倶楽部 代表） 長田真一（国土交通省東海幹線道路調査事務所 所長） 総合司会：黍嶋
	8日	(水)	運営委員会（06-22）	センター事務室	
	10日	(土)	東栄町月地区まちづくり協議会	東栄町・ 月地区公民館	アドバイザーとして、岸本、黍嶋、暁
	17日	(土)	2006年度地域づくりサポーター個人研究・ とよがわ流域大学修了生グループ共同提案事業結果発表会	本館5階 第3、4会議室	地域づくりサポーター（大石、王、大堀、大松、 伊藤、山内、辻、片野、天野、小川、村田、 加藤千、近藤、芝田、保木、山本、三宅） とよがわ流域大学修了生Aグループ、Dグループ
	18日	(日)	売木村ふるさとづくり促進事業調査報告会	売木村役場	岩崎、黍嶋、サポーター
	22日	(木)	運営委員会（06-23）	センター事務室	
	24日	(土)	2006年度第3回センター会議	研究館 第1、2会議室	
	26日	(月)	2006年度県境を跨ぐエコ地域づくり戦略プラン研究会 第1回研究成果報告会	ホテル アソシア豊橋	部会成果報告 「ソーシャルキャピタル・社会力評価部会」 （岩崎部会長） 「中山間地定住促進・地域再生部会」 （黍嶋部会長）



（2月17日開催の3事業合同研究会より）

◇ 三遠南信地域連携センター・センター会議委員

(2007年5月1日 現在)

		氏 名	所 属 等	備 考
1	センター長	佐 藤 元 彦	経済学部教授	
2	委員(学内)	蔣 湧	経済学部教授	事業責任者 (データベース)
3		岩 崎 正 弥	経済学部教授	事業責任者 (学術的共同研究)
4		黍 嶋 久 好	上 席 研 究 員	事業責任者 (官学連携)
5		岸 本 恵次郎	事務職員(主幹)	事業責任者 (教育・人材育成)
6		藤 田 佳 久	文 学 部 教 授 (大学評議会より選出)	
7		樋 口 義 治	文 学 部 教 授 (中部地方産業研究所より選出)	
8		印 南 敏 秀	経済学部教授 (総合郷土研究所より選出)	
9	委員(学外)	鷺 坂 浩 孝	豊橋市企画課長	行政関係
10		村 田 克 弘	浜松市企画部次長兼企画課長	行政関係
11		小 林 正 春	飯田市企画課長	行政関係
12		木 下 忠 彦	長野県泰阜村総務課長	行政関係
13		村 上 孝 治	東栄町企画課長	行政関係
14		星 野 君 夫	三遠南信地域経済開発協議会事務局 (豊橋商工会議所常務理事)	商工関係
15		白 井 良 始	JA豊橋 代表理事組合長	農林関係
16		杉 浦 文 夫	豊橋市政記者クラブ幹事 (東愛知新聞社編集局次長)	マスコミ関係
17		吉 井 弘 和	社団法人農山漁村文化協会東海支部長	マスコミ関係
18		西 尾 敏 正	中日新聞豊橋総局長	マスコミ関係
19		照 井 易 子	NPO法人三遠南信アミ副理事長 三遠南信地域交流誌「アミ」発行人	NPO関係
20		原 田 敏 之	NPO法人穂の国森づくりの会理事	NPO関係
21		小早川 久 幸	三遠南信教育サミット事務局 (豊橋市教育委員会総務課長)	教育機関
22		池 田 豊 人	国土交通省大臣官房技術調査課技術企画官	公的機関
23		高 井 克 明	国連地域開発センター研修部長	公的機関
24		金 子 鴻 一	東三河地域研究センター常務理事	研究機関
25	幹 事	近 藤 修 二	豊橋研究支援課長	



2006年度に刊行された報告書等《一覧》

2006年度には、センターニュース以外に、研究等の成果として以下が刊行されました。末尾に※印の付してあるものには余部がありますので、ご希望の方はセンターまで照会ください。

- 『地域づくり・地域経営評価システム基礎調査報告書』
- 『流域社会の近代化過程に関する総合的研究』
- 『落後（過疎）地域政策の日韓間比較分析』（韓国語版）
- 戸田敏行／高橋大輔『県境地域づくりの試み』（三遠南信地域連携ブックレットNo2）（※ただし販売物）
- 『三遠南信地域の中学生の社会力・職業意識を考える』（シンポジウム報告書）（※）
- 『転換期における若者の志向と地域の将来を考える：中・日中学生の社会力・職業意識の比較を中心にー』（※）
- 『平成18年度愛知大学・東三河地域研究センター・国土交通省豊橋河川事務所連携事業 とよがわ流域圏講座事業報告書』（※）
- 『2006年度とよがわ流域大学修了生グループ共同提案事業成果報告書』（※）
- 『平成18年度愛知大学・国土交通省東海幹線道路調査事務所連携事業 三遠南信「みち」の力を考えるフォーラム講演録』
- 『三遠南信サミットin東三河2006住民セッション成果報告書』（※）
- 『愛大の店「たがしろ」成果報告書』（地域づくりリポーター活動報告書 第2号）（※）
- 『売木村ふるさとづくり促進事業「定年さん、おいなんよ」計画調査報告書』（地域づくりリポーター活動報告書 第3号）（※）

《R A・研究員紹介》

か じ ひろもと

★ 加 治 宏 基 (リサーチアシスタント) ★



この度、愛知大学三遠南信地域連携センターのリサーチアシスタントとして採用して頂きました加治宏基と申します。地球規模で越境的課題が増殖しつつある今日、私たちの生活空間とその域外地域との関連もまた史上類を見ないほ

どに緊密になりました。センターが掲げるグローバルな視点に立った「地域づくり」トータルシステムの開発に向けて、専門分野である国際政治学の各種スキームを三遠南信地域へと還元出来れば幸いに存じます。何卒よろしくお願いいたします。

さ とう まさゆき

★ 佐 藤 正 之 (非常勤研究員) ★



この度、三遠南信地域連携センターが豊橋技術科学大学と連携して進めている連携融合事業、「県境を跨ぐエコ地域づくり戦略プラン」に関わらせていただくことになりました、佐藤正之と申します。私はこれまで、地域調査・研究や地域づくりに、様々な形で関わって参りました。その中で、地域が持つ「人」の活動や地

域資源としての「もの」の、再認識が重要と感じております。三遠南信地域には資源や活動が数多くあり、その潜在性は高く、私、微力ながらも、これまでの経験を生かし、センターが進める「地域づくり」の展開に資するために、「ソーシャルキャピタル社会力評価部会」及び「中山間地定住促進・地域再生部会」の研究活動に携わっていく所存です。そして、三遠南信地域の潜在性をより発揮するための一助になれば幸いです。

皆様のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

＝ 編集後記 ＝

最近読んだ内田 樹『下流志向』（講談社2007.1.31）は、ある意味衝撃的なものでした。学ばない子どもたち、働かない若者たちを取り上げているのですが、彼らは努力しなかったからとか、何かから逃げているわけではない、子どもたちはそう志向しているのだ、むしろ努力して下流に向かっている、それは資本主義が教えたロジックに忠実に思考し行動している結果なのだ、と述べているのです。つまり、子どもたちは労働主体として自らを立ち上げる以前に消費主体として自己を確立している、そこから学校でも「教育サービスの買い手」というポジションを無意識のうちに先取してしまう、教育を教育サービスの等価交換の場とみなしている、これを許したらもう教育は立ちゆかなくなると著者は言います。「学びは市場原理によって基礎づけることができない」と。『下流志向』は、同じ著者の『先生はえらい』（ちくまプリマー新書）と対になっており、興味を持たれた方はご一読を。（K）

編集・発行

愛知大学 三遠南信地域連携センター運営委員会

〒441-8522 愛知県豊橋市町畑町1-1

Tel: (0532)47-4157 Fax: (0532)47-4576

URL: <http://taweb.aichi-u.ac.jp/sen-center/>

Email: sen-center@ml.aichi-u.ac.jp